

10月の終わりに、韓国 ソウルに3日間行ってきました。昨年に続いて2回目で、いずれも息子夫婦からの誘いに乗った形なのですが、今回は生まれて10か月の孫娘を伴っての旅となりました。旅の目的を息子に言わせれば、ズバリ「食べまкруること」。恰好つけて言えば、「韓国の食文化」を堪能することです。

鶏や豚の鍋物料理、焼肉やユッケなどのホルモン料理が二人とも大好き、という息子夫婦。彼らがインターネットで見つけた店を求めて、地下鉄を乗り継ぎ、子供を交代で抱きながら、歩きに歩いてたどりつくわけですが。それにしても、ハングル語が全く読めず話せず、の息子夫婦がソウル市内の網の目のような地下鉄を乗り継ぎ、地図で探し出して、身振り手振りで、なんとか料理を注文するんですよ。しかも、小さな幼児を連れて行くんですからね。あいつらは、我々の世代から見ると、「宇宙人」ですよ。

日本人旅行者があまり行かないが、地元の人には知られている、という「路地裏の有名店」に行くと、たしかにおいしいものがありますね。その上に、非常に安くて、量もたっぷりです。、観光客用でない、そこに暮らしている人が行く店に行って、普通の料理を食べてみることは、その国を知る1番手っ取り早い方法かもしれませんね。

ソウル市内の明洞や南大門を中心に動いたのですが、広い通りの真ん中には、ズバリと屋台が並んで、あらゆるものが売られていますね。衣類や雑貨や玩具、なんでもありますが、食べ物の店が圧倒的に多くて、楽しいですよ。おでん風に煮込んだもの、揚げ物、お菓子類、そしてホルモン系の内臓が見事に店頭に並び、それを売るオッサンとオバサンの元気なこと！屋台こそ韓国の食文化、これこそがコリアンパワーだと思いますよ。



日本人と朝鮮人は非常に不幸な歴史を共有しているのは事実です。日本人には侮蔑があり、朝鮮人には恨みがあり、お互いにそれを拭い去ることは、至難の業であろう、と思っていました。しかし、長い時間の経過のなかで、世代が変わり、世相が変わり、価値観が変わる中で、お互いの関係に、良い意味での「変化」が生まれてきているようですね。韓国から映画や音楽という形で文化が押し寄せ、日本からは大量の旅行者が韓国に押し寄せる一國と國との関係は必ずしも良好でなくても、民間レベルでは交流がどんどん進んでいる、という感じですね。

繁華街を歩くと、店や屋台から呼び込みの声がかかります。それも必ず日本語で。私には日本人と韓国人の区別はつかないのですが、彼らは一瞬のうちに、私を「日本人」として判別するようです。これは不思議ですね。



その国へ行って、飯を食ってみりゃ、人間皆一緒というのが、ようわかるよのう。

(’11. 11. 3)